



Christine de Pizan (15世紀、The British Library所蔵)

様変わりしたドイツ

野村 廣之

今年の夏、16年ぶりにドイツを訪れた。文部省とゲーテ・インスティトゥートが共同で毎年行っている「ドイツ語担当教員ドイツ派遣事業」によって派遣され、ドイツ事情ゼミナール「変貌するドイツ」に参加した。このゼミナールは3週間に亘って行われたが、最初の10日間はブレーメンで、残りの10日間はシュベリーンという町で行われた。さらにゼミナール終了後、1週間ほど個人研修期間があり、私はベルリン・イエーナ・ヴァイマル・ミュンヘンの4都市を見て回った。今夏の研修については、いくつかの形で、詳しい報告をする予定になっている。ここでは、16年ぶりのドイツについての私の印象を簡略に記しておこうと思う。

16年という年月が非常に長い年月であったということを実感した。当然のことだが、ドイツもずいぶんと変わったものである。16年前のドイツでは、その土地によって少しずつ違っていたものの、月曜から金曜までの平日は通常の商店はだいたい午後6時で閉店（土曜は一般商店は正午まで、スーパーは午後2時まで）していた。日曜はホテルやレストラン、劇場等を除くすべての商店が休業である。当時は日本にはすでに24時間営業のコンビニエンスストアがあり、それと比べるとドイツは不便だと思ったものだ。現在では、日曜休業は変わらないが、デパートやスーパーを含む多くの商店が平日は午後8時まで、土曜でも午後6時まで営業している。24時間営業のコンビニはないが、かなり日本に近づいている。

16年前のドイツでは、銀行のCD（キャッシュ・ディスペンサー）は、あることは

あったが、あまり一般的ではなかった。現在は、どの都市でも、街の至るところにCDがある。私は以前のときと同様に、TC（トラベラーズ・チェック）を持って行ったが、TCなどに換えずに、クレジットカードを持って行って（たいていのクレジットカードが使える）、ドイツのCDでキャッシングサービスを利用する方が、簡便だし、得かもしれない。TCの場合は、日本でTCを発行してもらうときに手数料がかかり、現地で現金にするときにも手数料がかかるからだ。

テレビ放送も大きく変わった。16年前は、基本的に3チャンネル（全国ネット放送局が2チャンネル、地方ネット放送局が1チャンネル、いずれも公共放送局）しかなかった。どのチャンネルも午前中及び午後4時ごろまでは、定時ニュースなどを除いて、放送はなく、午後6時くらいから午前1時くらいまでが実質的な放送時間であった。公共放送であってもCMがあったが、番組の合間にCMを流すのではなく、例えば午後6時半から7時までの30分間がCMタイムで、この時間にCMを集中して流すやり方であった。現在は、チャンネル数は30チャンネル（これだけチャンネルを増やせたのはケーブル配信にしているからだろう）、しかもその多くが24時間放送である。日本のような商業放送局もあり、日本と同じように番組の合間にCMが流れる。

私は、16年前にも2カ月、ブレーメンにいた。1月から2月にかけての真冬であった。今回は真夏に行ったので、同じブレーメンでも、それだけですこし印象が違うのだろうと思う。ブレーメンは、自由ハンザ都市としての長い伝統を持ち、現在でも

ハンブルク、ベルリンの2都市と共に、都市でありながら同時にドイツ連邦を構成する州でもある。16年前のブレーメンは、少しくたびれているように見えた。失業率も高く、日本と比べると経済的にはずいぶん劣っているように見えた。現在のブレーメンは、州の財政状況はドイツの16州のうちで最も悪く、失業率も相変わらず良くないそうだが、以前よりずっと活気に満ちていた。街を走る市電の車両も新しい車両が多く、以前はそれ程でもなかったバスがたくさん走っていた。夏の間に済ませておく必要があるためだろうが、市内の至る所で、市電の軌道の改修工事が行われていた。町そのものも郊外に向かって拡大しているように見えた。以前はトルコ系の出稼労働者が多かったが、現在ではアフリカからの労働者が多いとのことで、実際にたくさんのアフリカ人を見かけた。

シュベリーンは、北ドイツのメクレンブルク-フォアポメルン州の州都である。以前の東ドイツ地域の町である。この町は、もともと大公領の首都であり、現在も美しい城がある。旧東ドイツ地域がどのように変わっているのか、を体験することが、今回のドイツ事情ゼミナールの第一の目的であ

ったと言ってよいだろう。ドイツの再統一は10年前の出来事であった。私が受けた第一印象は、外見的には西地域とほとんど変わらない、というものであった。たった10年で、これほどまでに同化してしまうのか、と私は思った。しかし、街をよく眺めてみると、ほとんどの建物がリニューアルされているなかに、まだ以前のまま取り残されている建物がいくつかあることに気がつく。市電も古い車両が多い。市庁舎のある中心部の広場の裏手にもう一つ広場があり、そこに露店商がたくさん店を出している。彼らの多くは、ヴェトナム人である。東ドイツ時代に、職業教育を受けるためにドイツへやってきて、帰国せずそのまま定住しているのだという。ベトナム料理のレストランのマスターと親しくなり、いろいろ話を聞かせてもらった。彼は、「いつかは故郷へ帰りたいのだが、二人いる息子たちにより良い教育を受けさせてあげるためにドイツに留まっているのだ」と言う。

さて、そろそろ紙数も尽きた。まとまりがなくて申し訳ないが、以上が16年ぶりのドイツのおおざっぱな印象である。

(ドイツ語)



シュベリーンの城

ヨーロッパで最初の女性職業作家 —クリスチーン・ド・ピザン

和治元 義 博

表紙の細密画は14世紀フランスの文筆家クリスチーン・ド・ピザン(Christine de Pizan or Pisan)を描いたもので、現在はロンドンの大英図書館(The British Library)のギャラリーに展示されている。このギャラリーには他に、眼にも鮮やかな数々の中世の彩色写本、英国作家たちの自筆原稿などが展示されており、昔の製本技術も分かるようになってい。中でも画期的なのが‘Turning the Pages’と呼ばれるコーナーで、通常ケースに展示されている写本は見開きの2ページ分を見るのがせいぜいであるが、このコーナーでは写本の映し出されているコンピュータ画面を手で触れることによって文字通り「ページをめくる」ことができるのである。

ピザンは1364年頃イタリアのベニスで生まれた。しかし、医者であり占星術師でもあった父親がフランス王シャルルV世の宮廷に招かれたため間もなくフランスに移りそこで生涯を過ごした。15才で結婚し、3人の子供をもうけたものの25才の時に病気で夫を亡くし、そのために残された3人の子供と母親、それに姪の計6人を彼女ひとりで養わなければならなくなったが、女性の地位がそれほど高くなかった時代の未亡人に何ができたであろうか?様々な不安から逃れるかのように彼女は一人から独学で勉強を始めた。幼い頃からイタリア語、フランス語そしておそらくはラテン語に通じていたおかげで歴史、科学、詩などを幅広く学び、それらの学問を武器にして、次第に彼女は文章を書き始めた。幸いにして最初に書いた恋愛バラッドと叙情詩は好評を博し、自らの楽しみと経済的な理由から徐々に文筆業の道に入ったピザンは、ついに筆一本で身を立てるヨーロッパで最初の女性職業作家となったのである。

ピザンはフランスの政治を始め数々の問題に関して意見を述べているが、とりわけ彼女を現

在でも有名にしているものは俗に「薔薇物語論争」と言われている文学論争であろう。『薔薇物語』(*Le Roman de la Rose*)は13世紀に書かれた約22,000行からなる寓意詩で、そこには「薔薇の薔」に象徴される「女性」を語り手である「私」が追い求める様子が描かれている。オウィディウスやギリシア神話を始め、夥しい古今の作家作品への言及、百科全書的な知識が全編にちりばめられた『薔薇物語』の後編には、古代から綿々と連なっている「女性嫌悪」(misogyny)の言説が満ち溢れている。ピザンの逆鱗に触れたのはまさにその部分であった。1401年から約2年にわたって繰り広げられた『薔薇物語』擁護派対反対派によるこの論争が果たして実りのある議論になり得たかどうかは別として、注目すべきは彼女の勇気であろう。彼女は、女性とは『薔薇物語』の中に描かれているような性悪で好色な存在ではないことを断固として主張したのである。ピザンにしてみれば、男性はまさにその存在を女性に負っているにもかかわらず、どうしてこうもあしざまに女性を非難するのが理解できなかった。マリアに代表される敬愛の対象としての「女性」と同時にイヴから始まる「諸悪の根源」としての「女性」という考え方が根強くあった時代に、ピザンは当時人気の『薔薇物語』を真っ向から攻撃し、女性の立場を擁護した最初の女性なのであった。その後書いた*Le Livre de la Cité des Dames*(『婦女の都の書』、1405)、*Le Livre des Trois Vertus*(『三つの徳の書』、1405)は、女性の徳、能力、社会的役割を称揚し、女性が世の中でどのように身を処すべきかの手引き書となっている。

ピザンの著作は女性嫌悪に取りつかれた男性作家たちとは違った視点から中世後期の「女性」の姿を我々に伝えてくれる。(英語)

閲覧ニュース88号

2000.10発行

北里大学教養図書館

〒228-8555 相模原市北里1-15-1

発行責任者 坂入 清

電話 (042) 778-8005